

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

3/Color Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

梓書房版

篁王

長歌集

北原白秋著

5

10

15

20

25

篁

北原白秋長歌集

房書梓

¥2.80

Centimètres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

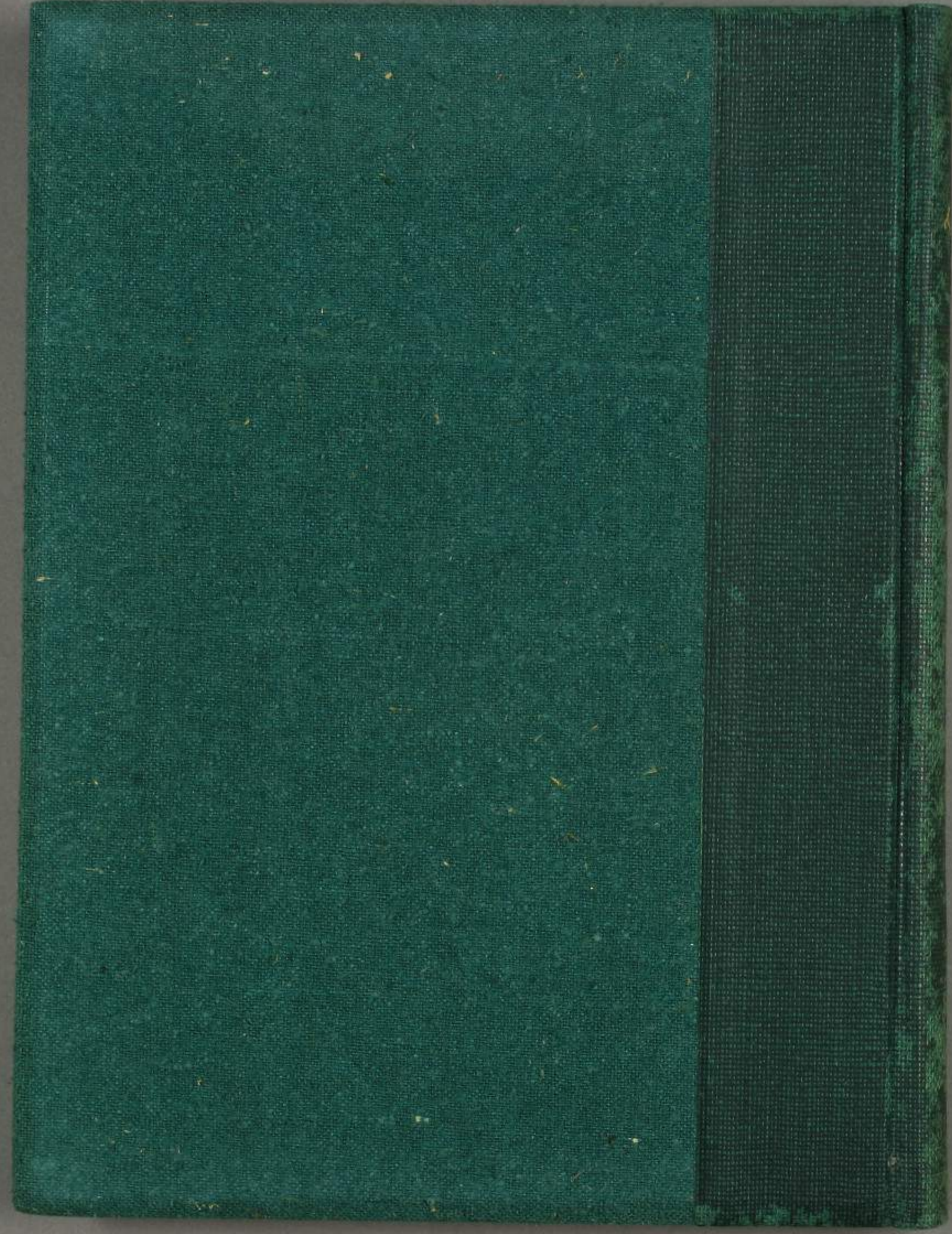
Red

Magenta

White

3/Color

Black



5

10

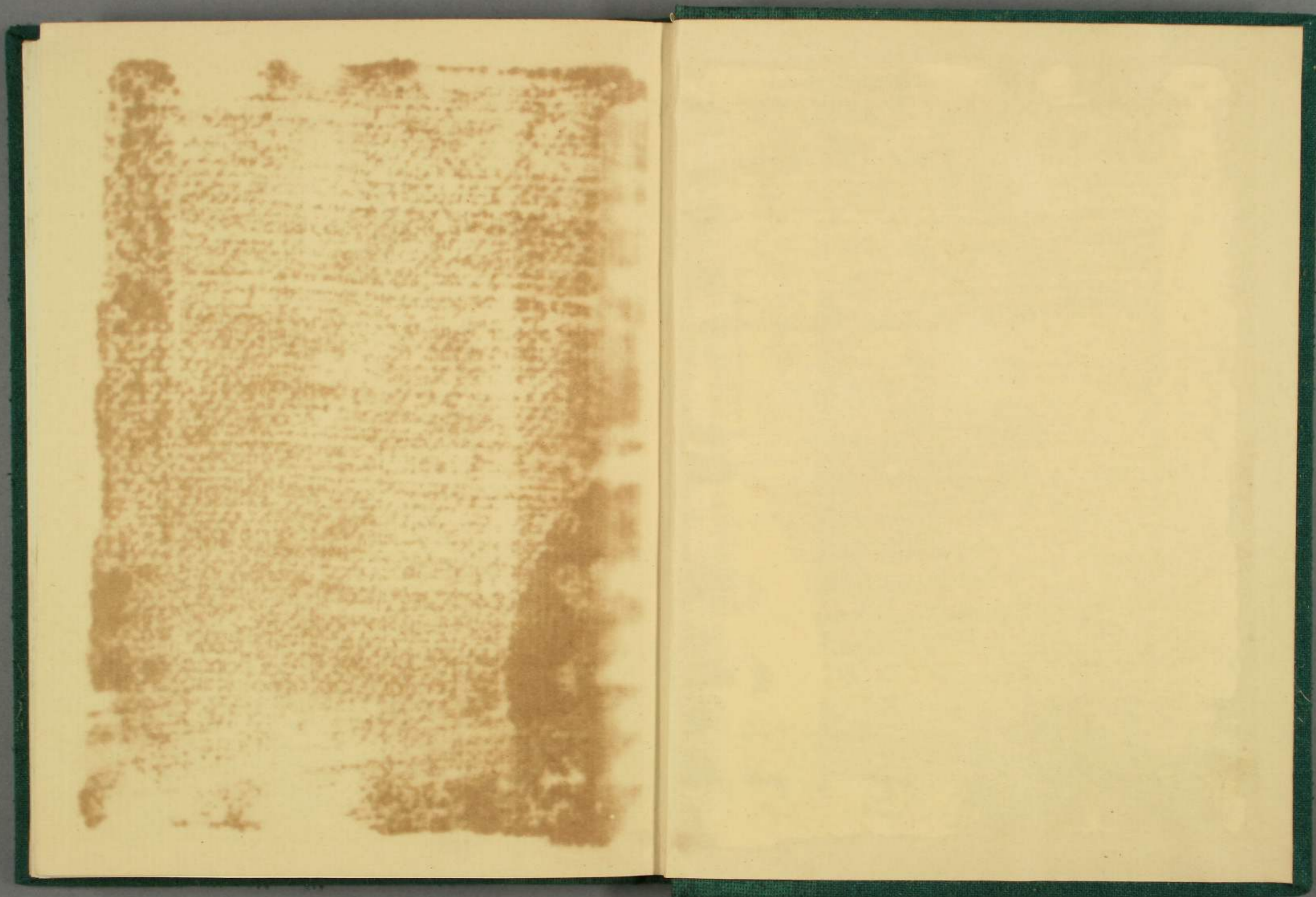
15

20

心身

西原上俊著

齊書房版



卷之二

七

心
心

心
心

序

我が長歌の總てを收めて、此の『篁』を成す。主として小田原の山莊にありて、竹林の日夕を楽しみ、移りゆく季節の風と光とに思を寄せたる、そのをりをりの古體を蒐めたり。

かの山莊はまことに篁の中にありて、その蕭々の音は、常に颯々たる松籟に唱和し、簡朴にしてそぞろに幽致にも満ちたりしかど、震災後、大破して繕ふに由なく、

ただ辛うじて住むを得たりき。
我が長歌も亦かくのごとし。長歌とは言へども、あながち萬葉の古體にもあらず、貧しき詩魂は時に新様の我趣を求めて、自ら姿容を破る。もとより流通するところの所縁ただに和歌の一體に繋ることをのみ幸とすべきか。また言ふところ無し。

昭和四年暮春

白 秋

目次

序	
竹と我(序歌)	三
言 祝	五
最勝閣に詣でて	九
春 鶉	一三
冬ごもり	一五
日あたり	一六
ととのはぬ春	一七
をさなき春	一八

見え来る春	一九
福壽草	二〇
春 鵬	二二
あるとき	二四
のどか	二五
つくし	二七
種子蒔	二八
このごろは	三〇
双柿舎	三一
多摩の浅春	三三
造り酒屋の歌	三五
餅搗きの歌	三八
道のべの春	四一

木彫人形	四三
月光と魚	四五
魚賣り	四七
米と雁	四八
荒彫の牛	五〇
水仙と菊	五三
水仙と菊	五五
聴けよ妻ふるもののあり	五八
元旦の夜のこと	六〇
落の臺	六三
ころころ蛙の歌	六四
浅 春	六七

水郷冬景	六九
立枯並木の歌	七一
潮來の入江	七三
夜の雪	七五
鳥の啼くころ	七六
函嶺の冬	七七
冬 的山岨	七九
冬 の棚田	八二
落葉行	八五
落葉吟	八八
孟宗と月	九一
竹と曼珠沙華	九三

竹の林の歌	九六
孟宗と月	九八
竹林の早春	一〇一
秋山の歌	一〇三
黎明の不盡	一〇五
遠山脈の歌	一一一
湯どころの歌	一一四
秋山の歌	一一六
水之尾の秋	一一八
岡の鉾杉	一二九
岡の鉾杉	一二一
榎と栗	一二四

蜩の歌	一二七
荒浪千鳥の歌	一二九
米の白玉	一三三
アツシジの聖の歌	一三五
米の白玉	一四〇
犬と鴉	一四六
童と母	一五一
麻布山	一五三
童と母	一五五
老いしアイヌの歌	一五七
長歌創作年表	一六五

篁 長歌集

竹と我 序歌

眺めても眺めあきずよ 親しめば親しむがまま
幽けきもありのさながら かかはらず またさ
またげず 竹は竹 我は我ゆる 竹がうれしも

言

祝

言 祝

大君。日の本の若き大君。神ながら朗らけき現人
神。青空やかぎりなき。國土やゆるぎなき。萬づ
世の皇統。皇孫や天津日繼。ああ、我が天皇。大
君。道の大君。大稜威。今こそは依り立たせ、け
ふこそは照り立たせ。高御座輝き滿つ、日の御座
ただ照り滿つ。御劍や御光添ひ、御璽やいや榮え
に、數多の御鏡や勾玉や、さやさやし御茵や、照

り足らはせ。大君。我が大君。現あきつ神かみ。神ゆゑに、
雲の上の生う日ひの光采あざりてますかも。

最勝閣にまうでて

最勝閣にまうでて詠める
長歌ならびに反歌

風速かぜはやの三保まほの浦廻うらま、貝島かいじまのこの高殿たかどのは、天あめなるや
不二ふじをふりさけ、清見しみ潟がた満干みちのこの潮うしほに、朝日あさひさし夕ゆふ
日照りひかりそふ。この殿どのにまうでて見れば、あなかし
こ小松こまつ叢生むらみひ、邊へにい寄よる玉藻たまもいろくづ、たまた
まは棹しづさす小舟こふね、海苔のり粗朶そだの間まにかくろふ。この
殿どのや國くにの鎮ちぢめと、御佛みほとけの法のりの護ごりと、言ことよさし築つく

かしし殿、星月夜夜空のくまも、御庇のいや高々
に、鐸の音のいやさやさに、いなめの光ちか
しと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳えしづ
もる。しづけくも畏き相、畏くも安けきこの土、
この殿の青き菟の、あやに清しも。

反歌

この殿はうべもかしこし白妙の不二の高嶺をま
もにぞ見る

春
鶉

冬ごもり

冬ごもりうらさびぬらし。隣りべは日のあたるよ
と、萩も枯れ萱も枯れぬと、よろしよと、見つつ
ぬくもる、吾が和なぎごころ。

反歌

おのづからうらさびぬらし萩の戸のへだての垣も
枯れて匂ひぬ

日あたり

つれづれと眺めあかぬを、枯れしとて萩は刈られぬ。ほほけしと薄も刈りぬ。ほのぬくみ刈りつる人も、うちたばね、かつぎていにぬ。日あたりの、となりの庭の、そのよろしさを。

反歌

枯れはてて萩は薄は刈られける日のたむるべのよろしみ來るを

ととのはぬ春

春はまだととのはざらし。土かづく黄の福壽さう、露の臺、萎へ葉の霜の莓や、裏藪の小すみれもまだ、楮枝べのつくつくしまだ、日あたりの枯れし芝生の、下萌えもまだ。

をさなき春

土見れば土の香立つを、はなはだし、春はをさなし。
露の臺いづらにふふむ。つくつくし萌え立つやいつ。
置く霜のややに浅くも、こぬか雨ややに繁くも、
裏藪や、堇さく邊の、いまだなじまず。

反歌

隣りべの春もをさなしたき火して梅のつぼみをし
たしとを見れ

見え來る春

かにかくにうつらふ冬や、隙間洩る風を寒むみと、
破れはてし家にこもると、はららうつ雨のこまかに、
置く霜の置くと解くれば、ふる地震のふると消につつ、
おのづから霞立つ日のどけくなりぬ。

反歌

いつしかとなごに來ぬらし向山の地震の壊え土崩
えかすみつつ

福壽草

冬ごもり、こもりあかねど、寒き日は吾もちぢま
りぬ。春まつと妻は急けども、のどならむ家も壊
えたり。子が愛づる薄葉鐵の太鼓、その紅き片面
剝げしに、土盛りて、せめて植ゑむと、福壽草霜
に抜き來ぬ、二株三株。

反歌

兒が愛づる薄葉鐵の太鼓剝がれたり植ゑて眺めむ

福壽草のはな

春 鴉

おもしろの春や、この朝、花しろき梅のはやしに、
をさな鴉^{あし}来てををりける。草餅の蓬よろしと、黄^き
粉^こつけ、食みつつきけば、いはけなの鴉や子の鴉
ふふみ音^ねの、まだなづむ音^ねの、うぐひすの鳴まね
びをる。頬白のふりまねびをる。しづ枝^えゆり、ゆ
り遊びをる。移り飛びをる。

反 歌

梅おほきとなりやかたは明るくて花のさかりをを
さな鴉飛ぶ

あるとき

春鳥の枝えに揺る聲の、ゆく水のかがよふ音の、朝
風の松のひびき、夕風の小竹こたけのさゆれの、おのづ
から我よあはれと、あはれにも恍ほれて、しらべて、
あるべきものを。

反歌

一ひといきに歌ひ成してぞおもしろきこのごろくやし
思ひ凝りつる

のどか

子よあそべ、父も遊ばむ、母呼ばむ、來り遊ばむ。
日あたりにつくしも立ちぬ。つくしべに蓬も萌え
ぬ。枯萱の裏むらさきの、ほのぬくみ、かがやく
根にはあなあはれ、白きなづなの花も群れたる。

反歌

うらなごむ春日よろしみ蓬生や花のなづなを踏み
て暮しつ

匂だちとみに春めく蓬生の下べのしめり踏めばか
なしも
春の草まだやはらかしとりませせて摘むとためけり
子るが帽子に

つくし

土筆摘み、妻と子と摘み、うすあかき土筆の莖の
緑だつその秀の粉の、かなしとも吾も妻も摘め、
をさな兒もしみみ摘みをる、そのをさなさを。

反歌

一つ一つ摘みし土筆をつくづくとまた植ゑてをり
もとなをさな兒

種子蒔き

鍬入れて、繁しげに篩ふるひて、搔かきならず土はよき土。
春雨のよべのしめりに、けさ蒔くや、種子はひな
げし、金蓮花、伊勢のなでしこ。向日葵は間まをよ
くあけて、枇杷のべに絲瓜は寄せて、蒔かずしも
朝顔夕顔、おのづからまかせたらなむ、垣の根か
たに。

反歌

盛る土に足あとつけて子も蒔くと晝かの種ぶくる日
にかがやきぬ。

このごろは

このごろはくつろぎにけり。歌よめばよくもあし
くも、墨磨れば濃けれうすけれ、うれしくも恍れ
て書きけり、かなしくも恍れて書きけり、ただ樂
しみて。

反歌

歌ふらくおのれ樂しむものならし樂しみてあらむ
ひとりこもりて

双柿舎

熱海遊草

おもしろの春の小雨や、うら向けに羽織かぶりて、
筥かつぎ、石いくつ飛び、童さび、聲うちあげて、
翁こそ歸り來ましぬ。柿がもと、白梅がもと、か
うかうと歸り來ましぬ。先生らしも。

反歌

柿双樹 梅五三本 この庭のさましづかなり小雨
流らふ

多摩の浅春

造り酒屋の歌

水きよき多摩のみなかみ、南むく山のなぞへ、老
杉の三鉾五鉾、常寂びて立てらくがもと、古りし
世の家居さながら、大うから今も居りけり。西多
摩や造酒屋は門櫓いかしく高く、棟さはに倉建て
並め、殿づくり、朝日夕日の押し照るや、八隅か
がやく。八尺なす桶のここだく、新しぼりしたた
る袋、庭廣に干しも列ぬと、咽喉太の老いしかけ

ろも、かうかうとうちふる鶏冠、尾長鳥垂り尾の
おごり、七妻ななつまの雌めをし引き連れ、七十羽ななそはの雛ひなを引
き具し、春浅く閑しずかなる陽ひに、うち羽はぶき、しじ
に呼よばひぬ。ゆゆしくもゆかしきかをり、内外うちとに
も満ち溢あるれば、ここ過ぐと人は仰あぎ見、道行く
と人はかへりみ、むらぎもの心もしぬに、踏ふむ足
のたどきも知らず、草まくら、旅のありきのたま
たまや、我も見ほけて、見も飽かず眺め入りけり。
過ぎがてにいたも酔よひけり。酒の香の世々に幸さいは
ふ、うまし國うましこの家ぞ、うべも富みたる。

反歌

大御代の多摩の酒屋の門かど櫓やぐら酒の香さびて名も古りにけり

西多摩の山の酒屋の鉾ほこ杉は三もと五もと青き鉾ほこ杉

餅搗きの歌

武藏野や多摩のみなかみ、御嶽道拂澤の口、春浅
き日南のそとに、餅搗くや爺は杵とり、白のべや
婆は手に捏ね、ぼたらことのどに對ひぬ、ぼたら
こよゆるにとめぐる。閑かなるここのりの里も、雛
祭ちかづきぬらし。御形咲き蓬萌えたり。古りぬ
れど雛もかざれり。山もあり川もありけり。こも
り啼く子るも居るらし。道埃しろじろ立てて、吹

き過ぐと風はさむけど、雲ゆけば日ざし洩れ来て、
おのづからうら安の世や、ぼたらこと爺は杵とり、
ぼたらこと婆は捏ねつつ、水滲すする。

反歌

春なれば草の蓬も搗きこめてのどかなるらし餅搗
きをる
道のべののどの餅搗きおもしろと見つつあかずも
杵の手ぶりを
めぐり見つつ見つつあかずも搗くたびに杵にのり來
る餅のふくらみ

搗きたての餅もちならずとしろき粉の米の粉まぶし手
にたたきををる

道のべの春

きさらぎや多摩の山方やまがた、まだ寒き障子あかりどの内、人影
の、手に織る機はたの、ていほろよ箴はりうつらしき。立
ちとまり、うつらに聴けば、からりこよ、杼ひの鳴
るらしき。三杖みつたの花咲き濕しめる、山の井いの、下井したいの
水も滴るらしき。

反歌

障子あかりどにすすろにひびく箴はりの音山邊の春はすでに動

木彫の
人形

きぬ
山かげの懸樋の縁の紐氷柱本末ほそうなりにける
かも

月光と魚

支那の木彫人形 その一

爺おやが張る四つ手の網に、月つきさしているくづ二つ。
その魚のくちびる紅あかき、この魚の背の鱗うろこ青あおき、現まとも思おもへばつめたたく、幻まぼろしと見れば霧きりらひつ。けだしくも息いきづく物の、水みづよりは空そらや明るあるき、水離みづがり空そらやさみしき。春はる浅あき潯陽江すんやうがうの、この月の魚。

反歌

月つき蒼あおき潯陽江すんやうがうの春はる浅あしふなべり低ひめ四つ手張よりた

る
たださへや月の光は霧らふらし四つ手に跳ぬる水
の江の魚
口あけしぼちりと紅くそめにけり小さき木彫のい
つくしき魚

魚賣り

支那の木彫人形 その二

魚賣りの翁が日永や、ふち廣の菅の編笠、たよた
よと擔棒かつぎて、はらはらに片手まはして、前
籠に魚かすくなき、後の籠魚か多かる。後の籠地
にしひきずる、重かるらしも。

反歌

菅笠の翁が日永となりにけりになひの籠のうしろ
さがりに

米と雁

支那の木彫人形 その三

米つくと、杵は踏みゐつ。雁射ると、弓弦張りゐ
つ。足に踏む、をかしかりけり。手にし張る、あ
はれなりけり。米つきは下べ見てゐつ。雁射るは
見て空べゐつ。とざまかうざま。

反歌

米つくとうつらうつらに踏む杵のこなた踏む時か
なたあがりぬ

雁射ると弓弦ひき放ち反る弓の小手にくるりとか
へりたるらし

荒彫の牛

生蕃作品

高砂の牡丹社の子か、命こめ、荒く彫りけむ。つ
たなけど静立つ牛の、をさなけどゆゆし力や。男
ごころよ、ひたぶる戀ふと、下ふかく燃ゆる思の、
えは堪へね、なほし堪ふると、遊びつつ、遊び彫
りけむ、くるしくも寂びつつ寂びけむ、外には見
せずも。

反歌

荒彫の木彫の牛のみぎり角ほきり缺きたり思ひか
ねきや

水
仙
と
菊

水仙と菊

窓掛の絹寒冷紗、硝子扉の外の短か日、短か日の
斜の日ざし。窓掛の絹寒冷紗、その蔭の水仙と菊
鉢臺の薄玻璃の壺。今朝咲きし一重水仙、いつの
日か挿しし寒菊。冷たくて白き水仙、やや温く黄
なる寒菊。水仙の青の葉は張り、寒菊の葉は半ば
枯る。水仙は水仙の影、寒菊は寒菊の影、その壺
も玻璃の影して、栗いろの砂壁にあり。硝子透き、

窗掛を透き、斜め陽の明るみざりは、冬もなほい
つくしく見ゆ。頼無き影としもなし、柔かく親し
かりけり。薄玻璃の影もゆらげり。妻とある二階
の書齋、午過ぎはただ閑かなり。湯沸のふき立つ
る湯氣、わがふかす煙草のけむり、また揺れてそ
の壁にあり。妻の影、わが影もあり。水仙と寒菊
の花、現身に正眼に見れば、まこと今あはれなり
けり。水仙と寒菊の影、現なく映らふ觀れば、現
なし、寂しかりけり。近々と啼き翔る鴨、遠々と
ひびく浪の音。誰か世を常なしと言ふ。久しとも

愛しとも思へ。山に住み世に離るとも、全く世を
厭ふにあらず。五月蠅やと、切に思へど、人來ね
ばたづきも知らず。妻と我、二人居れども、かく
てあれども、時をりはただ寂しくて、眼を見合せ
ぬ。

聽けよ妻ふるものあり

聽けよ、妻。ふるものあり。かすかにもふるものあり。初夜過ぎて、夜の幽かけさとやなりけらし。ふりいでにけり。なにかしらふりいでにけり。聲のして、ふりまさるなり。雨ならし。いな、雪ならし。雪なりし。あはれ初雪。よくふりぬ。さてもめづらにふる雪のよくこそはふれ、ふりいでにけれ。さらさらと、また音たてて、しづかなり。

ただ深むなり。聽けよ、妻。そのふる雪の、満みち満みちて、ただこの闇に、舞ひ深むなり、ふりつもるなり。

句

たまさかに浪の音して夜の雪なり

元旦の夜のこと

あな疎忽、吐息出でたり。氣にかけそ、何といふこともあらぬを。また妻よ、焙じてむ玄米の茶を。來む春の話、水仙の話、やがて生れむ子のことなども話してむ。元旦のこの夜の深さ。山住の我らなるゆゑ、いついつとかはりは無けど、今日はまたとりわけて、とりわけてよろしかりけり。全く今しづかなりけり。今さらに何をか言はむ。この

夜さのこの安けさは、神ぞただ守りますべき。心ゆくうれしさのうち、我はただ詩を思ふなる。汝またさし覗くなる。しづかなり、ただあはれなり。筆動く音のみぞする。身じろきの、息のみぞする。さてあらば夜も明けぬべし。あれ聴けよ、鶏啼くらしき。また聴けよ、浪の音なる。二人ただかくて起きゐて、まこと今ただ二人なる。二人なるいのちの息の、おのづから觸れかよふかな。親しくもゆき通ふかな。蜜柑など一つむきてむ。近々と火にむかひるむ、またすこし炭つぎ足して、さて

待たむ。二日の朝の、海原の、紅き日の出を。

落の臺

新らしき落の臺かな。珍らしき苦き香ぞする。そ
の落の臺、一つ刺し、二つ刺し、竹の小串に三つ
刺して、さて味噌つけて、火に焼きて、あな苦さ
よと一つ食べ、あなうまさよと二つ食べ、あない
つくしと三つ食べて、さて、さびしやと我ゐたり。
春さきの、夜のあは雪の、消なば消ぬかの聲聴き
てけり、そのしばらくは。

ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き、二つ鳴き、ころ
ころと後つづけ鳴き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、
また急に湧きかへり鳴く。いよいよに聲合せ鳴く。
近き田のころころ蛙、よく聴けば聲變り鳴く。聲
變り、一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。
あちら向きこちら向き、飛び飛びて、また水くぐ
り、うちひそみ、頬をふくらかし、鳴き鳴ける咽。

喉のさま見ゆ。あなをかし、前田の蛙。さみどりの
根芹か濕る、塗蛙かまだ新らしき。雨もよひ雨
よぶ聲の、寒けども寒しともなし、寂しけどなに
か笑へり。友よびてまた鳴く蛙、遠田にも遙かと
よもす。あなあはれ、遠田の蛙、また聴けば遠く
隔てて、夜の闇の瀬の音隔てて、いや離りうち霞
み鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪邊に寄
るごと、遠つ風吹き寄るごと、その聲は夜空
つたひて、いよいよに近くひびきて、さて絶えて、
またつづけ鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過

ぎて、また後夜ふけて、なほなほにとよもす聲の、
おそらくは、夜の明くるまで。崩黄月、月の圓暈、
遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちらめく星の、糠
星のかげ白むまで。ころころと、またころころと、
夜もすがら、夜をただ一夜、聲かぎり、また聲か
ぎり、ここたく鳴くも。

浅 春

春はまだ浅き菜畠、白き鶏日向あさるを、水ぐる
ままはるかたへの、窓障子さみしくあけて、女の
童ひとり見やれり、外の青き菜を。

反 歌

この春や水車が立つる水だまの早や大きなり芽柳
のもと。

水
鄉
冬
景

立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰ひづき あはれよと今朝見けさに來れば、
いつとなく水量み涸れつゝ、隙間なく氷張りけり。
枯すすき、土堤どての枯草、凍りつき白くきびしく、
兩側りょうがはの立枯並木たがねなみき、いよいよに白くさびしく、雪空
の薄墨色に、こまごまと梢明りこきみあかり、下空したぞらの小枝こえだのほ
そ枝立えだたちつづき、見れども飽かず、入り交り網目
して透く。兩側りょうがはの立枯並木、下見しもれば一側並木ひとがはなみき、

時をりにとまる鴉も、その枝の霜にすぼまり、渡り鳥ちらばる鳥も、その空に薄煙立つ。風吹けばかすかに揺れ、雪ふればいよよしづもり、さむざむと時雨るる夜半も、月あかり落ちゆく曉も、消なんとし消たずかすかに、現にもうつしけなくも、ただ寂し薄し果敢なし。霜ふかき野川の堰、今朝もまた氷張りけり。その川の兩側つづき、隙間なく枯木つづけり。あなあはれ、立枯並木。

潮來の入江

すな眞菰、眞菰が中に、菖蒲さく潮來の入江、はるばると我が求め來れば、そのかみの潮來の出島、荒れ果てて今は冬なる。旅やどり、消ゆるばかりに、一夜寝て寝ざめて見れば、霜白し水の邊の柳、何ひとつ音もこそせね、薄墨の空の霧ひに、ただ白く枝垂れ深めり。枝垂れつつ水にとどけり。また白き葦にとどけり。そのかげの小さき苦舟、い

よいよに霜の凝りて、こまごまと霜の凝りて、舟
縁も苦も眞白く、櫓も梶も絶えて眞白し。つくづ
くと眺めてあれば、閑かなる入江のさまや、苦舟
にのぼる煙も、風無けば直ぐに一すぢ、ほそぼそ
としばしのぼれり。廣重のその繪の煙、目に見れ
ば浮世なりけり。あなあはれ水の邊の柳、あなあ
はれかかりの小舟、寂しとも寂しとも見れ。折か
らや苦をはね出て、舟縁の霜にそびえて、この朝
の紅き雞冠の雄の雞が、早やかうかうと啼き出
るかも。

夜の雪

この夜さも雪はふりけり。かの夜さも雪はふりけ
り。その聲や靈も消ぬかに、降り積り、消ぬる白
雪。白雪のふれば幽かに、たまゆらは澄みてあり
けど白雪の消ぬるたまゆら、ほのかなるまたも消
にけり。白雪の、はかな心地の我身にも遣るかた
もなし。

鳥の啼くころゑ

かおかおと啼くは鴉　びよびよと啼くは雛ひな雞、雀
子はちゆちゆとさへづり、子を思ふ燒野の雉こ子、
けんけんけんと夜も高音なごんうつ。うつしみの鳥の啼く音
の、なぞもかく物あはれなる。天あまわたる秋の雁かり金、
春くれば遠き雲井に、かりかりと消えて跡なし。

函嶺の冬

冬の山岨

玉くしげ函根の山は、短か日のことにみじかく、
み冬さり霜下り來れば、午過ぎて日の目も知らず。
向つべの山は明れど、こなたなる高山の岨、風寒
く木の葉ちるのみ。早や早やも土は凝りて、岩角
の犬羊齒が下、枯れ枯れの雑木の根ごと、そくそ
くと氷柱さがれり。ほきほきと氷柱搔き折り、か
りかりと噛みもて行けば、あな冷た、つめたかり

けり。妻もまた冷たよと言ふ。二人ゆく高崖の上、
何の枝ぞ、透きてこまかにつや黒の果をちらつか
す。ふり仰ぎ透かし見すれば、高く澄む空の青き
にひえびえといそぐ雲あり、また薄く消ゆるもの
あり。長尾鳥飛びて叫ぶに、行きなづみ蹲みて見
れば、あな寒むや、溪裾紅葉、鉾杉の暗きを出で
て、ひと明り紅く燃えたり。その紅葉淵に映れり。
人知らぬ寂びとしづけさ。その下に飛び飛びの岩、
岩もまた幽けかりけり。冬はなほかそけかりけり。
あなあはれ、櫛の枯木、行き行けば見る眼に聳え、

瀧落ちてかげり日迅し。あなあはれ、山の端薄日。
下見れば早や塔の澤、こちごちに湯の香けぶりて、
ちらちらと揺るる燈の見ゆ。海見えて漁火つく見
ゆ。この岨や馴れし山岨、遠く來し旅にもあらね、
さは急ぐ道にもあらず。我がどちや言にこそ出ね、
今さらの連れにもあらねば、ただ二人ほつりほつ
りと、日の暮はほつりほつりと、また家路さし下
るのみなり。下るのみなり。

冬の棚田

丘窪の冬の棚田は、ねもごろに嬉しき棚田。寂び寂びて明るき棚田。たまさかに鵜茶の刈田、小豆いろ、温かきいろ、うち濕る珈琲の土。下田にはいくつ稲村、白金の笠めき和め、上畑は緑の縞目わづかにも麥ぞ萌えたる。その畑に動く群禽、つくづくと尾羽根振りては、また空へ飛び立ち翔る。あな冷た、群の鵪鶉、群れ飛べど目にもとまらず。

いづこにか鶉は叫べど、風さわぐけはひも聴かず。ただ低き日あたりの中、茅屋根の物静かなる、紫に寂び沈みたる、人氣なき庭にはあれど、背戸ごとに柿の實も見ゆ。裏丘へのぼる小徑は孟宗の林に見えて、その藪の上の日向に、蜜柑もぐ人もよく見ゆ。聲高にさては語りて、燧石切る葺火も見ゆ。珍らかにいとど澄めばか、遠近の枯葉のくぬぎ、草もみぢ、耀く薄おしなべてかくて安けし。あなあはれ、ここの丘窪、あかるけど古さび棚田、うれしけど冬の日棚田、その空に翔る群禽、鵪鶉

の薄黄の尾羽の、波うちて、ただ波うちて、影も
とまらず、影もとまらず。

落葉行

ひとりゆくこの山岨は、落葉のみ溜り濕れり。落
葉踏み、踏みつつ行けば、いづく飛び、鶉高音う
つ。かさこそり、櫟の枯葉、わがかたへまた聲立
てぬ。目おもての草崖薄、その穂にも落葉かかれ
り。草紅葉まだ温くけれど、その上にも落葉うご
けり。向ひ山、こなたの小丘、見るものはみな枯
木のみ。空ぐるま軋るを見れば、上岨を尻毛振る

赤馬、ひようひようと吹かれゆく馬子、みな寒き
冬のものなり。溪の上の小茶屋の椅子も紅葉積み、
その溪かけて、はらはらと落葉ちりゆく。山窪の
幾むら藁屋、水ぐるま廻れる見れば、ほとほとに
水も痩せたり。檜原ただ目に寒く、入りゆけば目
ざし薄きに、雨のごとちる落葉あり。よく見れば
いよいよ繁し。聲立てていよいよ寂し。ほうほう
と立てる雑木の岨路ゆき、別れ徑ゆき、當處さへ
果てはわかねど、風のまま歩みのままに、行き行
けばただ落葉なり。前うしろただ落葉なり。かさ

こそと、また、はらはらと、空にも地にも聲ばかりして。

落葉吟

かうかうと照る月ながら、雨のごと飛ぶ落葉かな。
ああ落葉、その影見れば、秋もはや老いにたるら
し。ああ落葉、その聲きけば、おのづから冬か待
たるる。身の老といふにはあらね、おのれまた若
しともなし。さやけさはかかる夜ながら、見の恍
れむ光にあらず。杉木立青きはあれど、隣山早や
も瘦せたり。枯れ枯れの秀枝を透きて、月はただ

白くあらはに、落葉また風に吹かれて、へうへう
とかぎりも知らず。いつの日かまたと還らむ、い
つの世か久しかりちふ。これやこの常なかる世に、
年月の移らふまにま、我はあり、我はあれども、
いつ知らず後べのみ見る。なほなほも先きぞ氣遠
き。しかもなほ過ちにけり。つくづくと耻ぢ泣き
にけり。さりとはおのれ知るから、ただふかく
遜るのみ。寂しがり寂しがるのみ。ほとほとに堪
へは得ぬとも、いとせめてひとり遊ばむ。ただひ
とり物も思はむ。ほつほつと歩み歩まむ。あはれ

なる末の末かも、飛び散らふ落葉なるべき。落葉
なら風にまかせよ。照る月に、北山風に、夜あら
しに、影は影とし、はらはらと、ただ、はらはら
と聲ばかりせよ。

句

おらもまたあなたまかせぞ一茶坊

孟宗と月

竹と曼珠沙華

わが門かどの竹の林に、曼珠沙華赤く咲きたり。竹の
根の一つ一つに、この華はなや六つ七つづつ、日に増
しに数かさみゆく。怪しくも赤き卷まき鬘むす、鬘むす細の蓮
華はななす華はな、咲きさかるその華見れば、おのづから
秋も澄みけり、いよいよに風も寂さびびけり。隣り寺
寺の古墓、日あたりは未まだも暑けど、墓掃くとか
がむ影すら、闕伽汲むと寄るすらもなし。あなあ

はれ、摩訶曼珠沙華、出で入るとひとりながめて、
時をりは妻とながめて、昨日ゆかいよ殖えしと、
まだ今日も赤しとぞ見る。孟宗のしだれ小竹ゆゑ、
日は射せどいぶせき藪を、常くぐり我はありけり。
わびしけど遊び馴れけり。山住の心安さは、藪越
しに浪の音聴き、里囃子うれしとも聴け、施餓鬼
過ぎ流石さびしく、人訪はぬ今は堪へえね、ふと
し出て、竹の根見れば、曼珠沙華赤く赤きに、ち
らと向き、釣眼野狐、うしろ向き尖り口して、小
藪吹き、吹き吹く風に、日の暮に、あな、飛び飛

びて、消えつつ失せぬ。

竹の林の歌

雨あとの竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の濕る根ごとに、何か散り、深く光れり。その節のひとつひとつに、何かまた溜り光れり。その小竹のさみどりの葉に、何かまた揺れて光れり。金色のその光るもの、こまごまと目に染みるもの、雨ふりてあかれるのちは、とりわけて揺れてうつくし、寂しくて見てゐるきは、いよいよ消え

てうつくし。揺るともただ見て居らむ、消ゆるともまた見て居らむ、堪へ堪へて日の暮るるまで、なほなほに寂しがりつつ。わが宿の竹の林の夕あかり、裏山松の松風の音も連れたる。

孟宗と月

さわさわと揺るるものあり。午夜ふけて揺るるものあり。わが窓の硝子戸の外、眞透せば月に影して凍え雲絶えず走れり。圓かなる望月ながら、生蒼く隈する月の、傾けばいよ薄きを、あな寒や、揺るる竹あり。孟宗の重きしだれの重なりのその上に抜けて、ただひとり揺るる秀のあり。目が醒めし、夜風か立ちし、さわさわと揺れてあそべり。

しだれつつ、前にうしろに照りかげり、揺れてあそべり。圓かなる望月ながら、生蒼く隈する月の、飛び雲の叢雲が間を、ふと洩れて、時をり急に明るかと思ふ時なり。目に見えてさわさわと照り浮ぶ、孟宗の、あな、一きは強き狐光のその月に、さながら生きてをどるかに、近明りして勢ひ舞ふ、かと見ればまた、なにか暗く薄かげりして、揺らぎ止み、揺らぎ騒立つ。この夜さや、夜鳥も啼かず、藪かげの隣の寺もしんしんと雨戸鎖したれ。時として川瀬の音の、潮騒とひびき添ふのみ。

それもただ遠し氣疎し。あなあはれ、この夜の山
に、何しらず目のさめしもの、我のみか、揺れそ
よぐあり。揺れそよぎ、獨り遊ぶと、揺れそよぎ、
この目の外そとに、またさわさわと音立ててゐる。

反歌

物すごき孟宗藪の月あかりかげるかと思れば騒ぐ
葉の影

竹林の早春

わが庵の竹の林に、こぬか雨今朝も濡れり、春さ
きのこぬか雨なり。ふるとしも見えぬ雨なり。こ
ぬか雨小竹こたけにこもりて、香炷かづけば香かも濡りて、事
もなし、ただ明るけし。こまごまと濡れかかるの
み。漂渺と煙曳くのみ。しづかなり、ただ安らな
り。顔出して、つくづく居れば、笹子啼き、目白
寄り来る。笹葉揺り、揺りてまた去る。散りたま

る去年の枯葉も、寂しけど寒しともなみ、何かし
ら萌ゆる緑の、春は早や竹の根にあり。よき濕り
かくて濕らば、竹煮草、葛、蔦の蔓、やややに
すずるき出でむ。髭長の藪の菫、莖などやがて
咲くべし。松風の聲は沈めど、常ならぬわびしさ
ならず。裏岨ののぼりくだりに、ほつほつと通る
馬さへ、時をりは青菜つけつつ、聲高の人の話も
濡れながら行けば親しよ。静ごころ香をつぎつつ、
さて、今日もうら安くこそ。こぬか雨ふるがごと
くに、こまごまと慈しみてむ、春さきの我の思を。

秋
山
の
歌

黎明の不盡

天地の闢けしはじめ、成り成れる不盡の高嶺は、
白妙の奇しき高嶺、駿河甲斐二國かけて、八面に
裾張りひろげ、裾廣に根ざし固めて、常久に雪か
つぐ峰。かくそそり聳やきぬれば、厳しくも正し
き谷。譬ふるに物なき姿、いにしへもかくや神さ
び、神ながら今に古りけむ。たまたまに我や旅行
き、行きなづみ振さけ見れば、妻と來てつつしみ

仰げば、あなかしこ照る日もわかず、暮れゆけば
雲巻き蔽ひ、霹靂はためくさへに、電光青の火柱、
火柱の飛ぶ火のただち、またとどろ電ぞ飛びたる。
御殿場のこの驛路、ひと夜寝て午夜ふけぬれば、
まだ深き戸外の闇に、早や目ざめ獵犬が群、勢ひ
起き鎖曳きわき、跳り立ち啼き立ち急ぐに、朝獵
の公達か、あな、ひとしきり飛び連れ下りる騒め
きの、さて出立つらむ。けたたましく自動車の鳴
り爆ぜる音、咽喉太の唸り笛さへ、凝り霜の夜凝
りに冴えて、はた、ましぐらに何處へか駈け去り

去りぬ。底冷えの戸の隙間風、さるにても明け近
からし。目のさめて明告鳥の息長に啼き呼ばふ聲。
そことなく應ふるころの、裾野原揺りとよもすに、
おのづ覚め我は在りけり、目はさめて我もありけ
り。つくづくと首延し見れば、こちごちの濃霧の
なびき、溪の森、端山の小巖、黒ぐるとまだ氣ぶ
かきに、びようびようと猛ける遠吠、をりからの
曉闇をつづけ射つ速弾の音。たださへも益良夫ご
ころ溢れ揺り抑へもあへぬを、見透かせば渦巻く
霧の瑠璃雲の漂ひが上、數かぎりなき糠星の瓔珞

の中、あなあはれ、不盡の高嶺ぞ、白妙の不盡の
高嶺ぞ、今し今、一きは清き紫の朝よそほひに出
で立ち立てれ。夢か、こは、まことなりけり。夢
ならず、現なりけり。起きよ起きよ。まことこれ
日の本の不盡、木花咲耶姫の神、神しづまりに鎮
まらず不盡の御嶽ぞ、見よ目に見えて近ぢかと明
け初むるなれ。起きよとて妻揺りたたき、目ざめ
よとまた呼び覺まし、口漱ぎ、さて、身をきよめ、
さむざむと袂合はし、しみじみと二人い寄り、ひ
たすらにかくて見惚れぬ。時ありぬ。やや時経れ

ば、ほのぼのとして匂だつ山際の色、黎明の薄樺
色に焼け初むるその静けさに、日出づる前か、明
鴉かをかをと二羽連れだちて羽風切る、その羽裏
いよよ染みたり。はたはたと山鳩もまた二羽競ひ
行く。観る人も妻とし見れば、飛ぶ鳥も連るるも
のかも、うれしやと妻は見て言ふ、我もまた微笑
みて見つ。さるからに灰紅き蓮華の不盡の隈ぐま
の澄み明りゆく立姿、頂の邊は更にも紅く、つや
紅く光り出でたれ。よく見ればその空高く、かす
かにも靡くものあり。高うして吹雪すらしか、か

すかにも雪煙立ち、その煙絶えずなびけり。いよ
いよに紅く紅く、ひようひようとう立ちのぼる雪の
焰の天路さしいよよ盡きせね、消えてつづき、消
えてつづけり。あなあはれ、かのいつくしき、こ
のかうかうしき。眺むれど見れども飽かず、言に
さへ筆にさへ出ね。あなかしこ。不盡の高嶺は日
の本の鎮めの高嶺、神ながら奇しき高嶺、この高
嶺まれに仰ぎて、この朝、新にぞ見て、この我や、
ただこの妻と、ただえも知らず涙しながる。

遠山脈の歌

上つ毛の加牟良の北に、天そそる妙義荒船、遙ば
ると眺めに出れば、この日暮ふりさけ見れば、い
や遠し遠き山脈、いや高し高き山脈、いやが上に
空に續きて、いや寒く裳を重ねて、幾重ね、幾疊
り、末途に雲居にぞ入る。かりそめの旅にはあれ
ど、夕されば内にも堪へず、外に出でてひとり
在りけり。向ひ吹く川の瀬の風、川風の吹き凍え

に、我が向ひ迎る高崖、遙か見る北の山脈。冬も
早や絹のつや雲、卷雲の卷きのなびきに、氷凝り
雲層雲の群、重ね雲、寂び金の雲、下明り雲とも
わかず、薄ざらひ山ともわかず、たださへも、現
ならぬを、たださへも果てしわかぬを、日の射す
か末廣の虹、幾すぢか透きて落せり。かうがうし
その薄光、寂び寂びしふらちなすぢ、濃き淡き
峯の疊みに、引きちがふ山の小巖に、また雨と和
みそそげり、柔かき金色の霧。あな遠し遠き山脈、
あな高し高き山脈、立ちどまり見れども消えず、

目ふたぎて傷めど盡きず、目翳げして遙けみ見れ
ば、いや寂し薄き陽の虹、また見ればさらに彼方
に、いや高き連山の雪、いや遠き連山の雪、ひえ
びえと、つぎつぎと、續きつづきて耀きいでぬ。

湯どころの秋

伊豆吉奈

ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに、櫛立ち、櫛の傍に、斑牛ひとり居りけり。安らかに繋がれてけり。山峡の湯どころの秋。出で見れば下の小橋を、杖つきてわたる子もあり。垂稻の黄ばむ田づらは、をりふしに雀むれ立ち、道ぞひの茅屋の庭に、白菊の盛り見せたる、胡麻と粟並べ干したる、暇あ

る心に見れば、なかなか今日は安けし。向つべに目のかげる山、なほ明く温かき山、その空の白き綿雲、ちろちろと渡る禽さへ、なかなかにはれとも見れ。妻と来て、二人来て、七日まり住み馴れてのち、やうやうに紅葉色づく遠近のこの眺めなる。あなあはれ、ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに、櫛立ち、櫛のかげに、斑牛ひとり居りけり。繋がれて、ただねんねんと草食みにけり。

秋山の歌

伊豆吉奈

秋山のなぞへの薄すすき、ひとつらね揺りかがやけり。
秋山の、名も無き山の、草山の山の端薄すすき、その穂
の薄揺りかがやけり。この夕、出でて見て、岨さばゆ
見て、丸木橋妻と渡りて、また見ればまたかがや
けり。その薄刈る人もあり。また負ひて降り來る
もあり。下り來て、行きすぎざまに、さわさわと
背見そびせゆく、さわさわの背の薄またかがやけり。

雲白くうかべる峽の日屯ひたむの空間そらあひの中、こまごまと
飛べる羽蟲も、よく見れば一つ一つに命あり、舞
ひ立ち光る。閑しづかなり、ただ安らなり。まだ深き
日のあたりなる。暑からず、寒くしもなく、まだ
温ぬき日のかげりなる。湯どころのうしろのやまの、
秋山のその柔かき草山の、このもかのもにさわさ
わと音する薄、穂薄の、今日來て見れば、揺りか
がやけり。あなあはれ、我も見て、妻も出て、二
人ながむるさわさわ薄、そのさわさわ薄。

水之尾の秋

この秋よ、雲は白うて、事もなき世にしあるかな。
山村のこの水之尾、樋のへりにみそ萩さきて、
みそ萩に水だまはねて、水ぐるまやまずめぐれり、
その水口に。

反歌

水ぐるままはる樋口のかやくは夕日か水にさし
あたるらし

岡の鉾杉

岡の鉾杉

わが宿の岡のなぞへに、杉いくつ屯せりけり。せ
うせうと屯せりけり。鉾杉のひとむら木立、鉾杉
の鉾を並べて、この朝明しぐるる見れば、霧ふか
く時雨るる見れば、うち霧らひ、霧立つ空に、い
や黒くその秀浮び、いや重く下べ鎮もり、いや古
く並び鎮もる。凡てこれ墨の繪の杉、見るからに
寒し厳かし、かうがうし寂し崇高し。あなあはれ、

岡の鉾杉、をちこちの小竹のむら笹、柿紅葉、梅
が枝の蔦、とりどりに色に出づれど、神無月する
のしぐれに濡れ濡れて、その葉枯れず、落葉せず、
透かず、薄れず。ただ上べわづか赭みて、天鷲絨
の焦茶いろすれ、深ぶかと黒くか青く、常久に古
び鎮もる。寂しくも寂しき姿、堪へ堪へて常立つ
心。あなあはれ、冬の鉾杉、海ちかき岡の鉾杉、
鉾杉の渦成す霧に、涯知れぬ海も見わかず、ひさ
かたの空もえわかぬ、時をりは、渡りの鳥のはぐ
れ鳥ちりぢりと落ち、羽重の一羽鴉も飛びなづみ、

ややに來て揺る。あなあはれ、雨の鉾杉、見てあ
れば幽かに揺れて、ふる雨に幽かに揺れて、ただ
せうせうと音たてにけり。

榧と栗

傳肇寺、小さき古寺、この寺の山の墓場に、榧と栗並び立ちたり。並び立ち、ともに老いたり。榧の木は栗の木のそば、栗の木は榧のかたへに、さびさびてすでに老いたり。その榧よいつよりか老い、この栗よいつよりか立つ。榧と栗さびにさびつれ、なほし未だ花は咲きけり。年ごとに花はつけけり。榧の木はかすかなる花、栗の木は露はな

る花、その榧に小さき榧の實、この栗に栗の青毬、風吹けば實さへ毬さへ、またいつかこぼれこぼれぬ。枯れ枯れて土にかへりぬ。見る人も知る人もなし。寺まうで墓まうでびと、たまさかに蹲み通れど、誰ひとり振り仰がず、誰ひとり眼にも求めねば、ただ二木立てるのみなる。榧と栗さびるのみなる。あなあはれ、榧と栗の木、落葉する栗も寒けど、常青く立てる榧の木、冬の日はことに高しよ。栗の木はいよよ透けれど、榧の木はいよよか黒く、薄日射函根の落暉、秀に受けてひとり

尖れり。いや黒くひとり堪へたり。雨まじり霏ふる日も、風まじり雪の飛ぶ夜も、こごしくも凍え立ちたり。親しくも立ちて堪へたり。あなあはれ、老木の二木。親しくも並ぶ姿の、寂しくも隣り合ふ木の、頼り無き二木を見れば涙しながる。

反歌

この寺の老木の栗のいが栗はまたすがれたり榧の木のみへ
榧は榧さしも青けど落葉木の栗は栗とて枯れにけるかも

蝟の歌

蝟の啼き連るるなり。二つなり。啼き連るるなり。その二つ啼きやめばまた、こなたより啼きしきるなり。ただひとつ啼きしきるなり。孟宗の片日射なり。山松の遠日射なり。かなたには暉りきらふ海、こなたにはわたる山霧。山ぎりに、山の施餓鬼のほとほとに果つる頃なり。金色に秋の日射の、斜なし澄みとほる中、蝟は啼きしきるなり。急き

急きて啼き刻むなり。二つ啼き、一つ啼き、また
こもごもに、啼き速むなり。

句

蛸かたなが二つ啼きまた一つがこもごもに

荒浪千鳥

磯長の小ゆるぎの濱、この濱や荒浪高し。この夜
ごろいよいよ高し。時化つづき西風強く、夜は絶
えて漁火すら見ね、をりをりに雨さへ走り、稻妻
の青の映りに、鍵形の火の枝の棘、ひりひりと鋭
き光なす。そのただちとどろく巻波。時として電
さへ飛ぶに、なにぞ何ぞ亂るる鳥は。なにぞ何ぞ、
散り散る鳥は。目に見れば數かぎりなく、聲きけ

ば消なば消ぬかに、へうへうと連れ啼く鳥の、群
千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立ほたちの空を、とまるすべ
寝るすべ知らに、ただ飛びて散り散る千鳥。この
海や涯はたし知られぬ、この荒れや測り知られぬ、初
夜過ぎて、また後夜かけて、闇ふかく翼はねふる千鳥、
この雨を、また稻妻を、ひた濡れて亂るる千鳥。
或る聲は遠くはぐれて、或る群は千鳥型せうがたして、ま
た或るは陸りくの方向き。また或るはちりちりと散り、
すれすれに或るは落ちつつ、波のうへ驚きて飛び、
時に消え、時に明り、いよいよに白く恐れて、い

よいよに青あおに染まりて、時わかず連れ啼く千鳥、へ
うへうと凍こもゆる千鳥。いつまでか全く迷ふぞ、い
つまでか飛びてやまぬぞ。磯長いそながの、小ゆるぎの荒
浪千鳥。荒浪の、天うつ波の、逆まきのとどろき
が上、ああははれ、また向き向きに、稻妻の青あおの
脅えに、連れ連れ亂る。啼き連れ亂る。

米
の
白
玉

アツシジの聖の歌

アツシジの聖、フランチェスコの物語。フランチェスコは雀子を愛しみ給ひき。雀子も慕ひまつりき。現身の人にてませば、かの人も亦、人のごと寂しくましき、寂しくて貧しくましき。寂しくて貧しきが故、遜り、常に悲しくましき。いといと悲しくましき。それ故に、末遂に神を知らしき。その聖、道のべに立たしたまへば、雀子

は御後^{みあき}べ慕^こひ、御手^{みて}にのり、肩にとまりき。さて、ちゆんちゆんと、鳴いたりき。あなあはれ、雀子よとて、雀子を撫でさすり、搔い撫でさすり、偽りなせそ、むさぼりそよ、おのづからなれ、正しく、直^{ただ}く、常童^{とこわら}にて、天地^{あめつち}の神ごころにも通へとぞ、悲しかれよと宣^{のたま}ひましき。御法^{みほり}説かしき。雀子を愛^あしみたまへば、雀子も慕ひまつりき。雀子にも解^ときやすき御言葉なれば、雀子も御言葉ををろがみまつり、羽根をすり頭^{かぶ}さげてき。またちゆんちゆんと鳴いたりき。さて徒^{いたづら}に物を欲^ほり、浮か

れ、たばかり、盗まざりけり。偽らず、安らなりけり。かかる時、草原に露満ちて、蟲鳴きそそり、飾り無き野の花のかをり、吹く風の涼しきままに、空は圓く澄みわたりて、また、塵ひとつだにとどめざりければ、聖の御頭^{みかぶ}かすかに後光をはなち、差しのべたまへる兩^{ふた}つの御手^{みて}の、十の御指は皆輝きて、その掌^{たなひら}の雀子さへも光るばかりに喜び羽うち、御前^{みまへ}に輪を成す雀のむれも、みなみな雀の後光をかすかに立ててぞ、啼^なき恍^まれ遊ぶ。フランチエスコは御空を仰ぎて、主よ、主の奴僕^{しもべ}はかくあ

りぬ、かく貧しきが故にこそ、世のあらゆるもろもろの御寶をも、却つて主のごとく、この身ひとつに保ちまつる、ありがたやハレルヤとぞ、涙ながして讃め禱りませば、雀もともに、ハレルヤ、ハレルヤと、眼を上げ、涙ながして御空を仰ぐ。現身の人の聖と、現身の鳥の雀と、雀とフランチエスコと、朝夕に常かくなりき。あなあはれ、世の常の事にはあらずよ。濫かき御心ゆゑぞ、大きな博き御心もてぞ、ありとある愛しみたまへば、御心は神にもいたり、雀にも通ひましけむ。あな

あはれ、人のこの世の現にも、かかる聖のましまししものか。

米の白玉

一

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。そを一粒、また二粒、三粒、四粒と數ふれば、白玉あはれ。うすき瀬戸、白の小皿に、幾すくひすくへどあはれ、かそかと聲ばかりして、ころころと音ばかりして、搔き寄せて十粒に

足らず、ひろへれど十粒を出でず、かそかとこころと、聲するは、空しき櫃の、空櫃（まなび）の米櫃の底。ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

二

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。そを一粒、また二粒、三粒、四粒と數ふれば、白玉あはれ。搔きよせて十粒に足らず、ひろへれど十粒を出でず。今は早や、我は饑ゑむ

を、我が妻も餓ゑはてむを、ましら玉、しら玉あはれ。さはいへど米の白玉、貧しとてすべな白玉、そのまたを雀子も欲れ、ひもじきは誰もひとつよ、雀子も来てはのぞき、餓ゑて鳴き、鳴きては遊び、遊びては求食り、求食るを、米の玉あはれ。雀来よ、雀来よ来よ、いとせめて啄めよこの米、ひもじくばふふめこの米、汝らが餓ゑずしあらば、うまからば、うれしくかはゆく鳴くならば、白玉あはれ、わがどちは、この我は、わが妻とても、今さらに食さずともよし、食さずともよし。ましら

玉、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

三

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。絶ち絶ちて幾日をか経し、餓ゑ餓ゑて幾夜をか経し、この我や、生きて貧しく、生きんすべせんすべだにもなきものを、米の玉、しら玉あはれ。はづかなる、あるかなきかの金を得て、かきよせて、市のちまたに米買ふと、破れし囊を

手にさげて、これに米、すこし賜べよと乞ひのめ
ば、入れて賜びけり。さらさらと入れて賜びけり。
うれしくて走り出づれば、金賜べと人の驚く。忘
れたり、ゆるされませと赤らみて、金置きて、ま
た駈け出れば、うしろより米はとおらぶ。驚きて、
また忘れたり、ゆるされと、此度はしかと、しら
玉の米の囊をひきかつぎ、かかへて戻る。米の玉、
しら玉あはれ。現なるこれや現か、夢ならず、現
なりけり。その現、うつつなるこそうれしかりけ
れ。しら玉の、ましら玉の、しら玉あはれ。しら

玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

反歌

米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはかなかりけり

犬と鴉

一

犬の子に白き飯皿、子鴉に青き飯皿、朝夕に同じ飯盛り、おのがじじ食せよと呼べば、犬の子は己が飯惜しと、子鴉は己が飯惜しと、犬の子は子鴉が飯、子鴉は犬の子が飯、ひたぶるに奪ひ取らむと、ひたぶるに盗み食さむと、ただ啼きつ吼えつ

噛みつす。己が飯はすでにあまるを、己が飯に足れりとはせで、なじかさは他の物欲る、なじかさはよその物欲る。ひとしけくかはゆきものを、ひとしなみ飯は盛れるを。犬の子よ、子鴉よ、あはれ。

二

あなあはれ、みぎりひだりに、子鴉と犬の子と寄る。此方向けば子鴉あはれ、其方向けば犬の子あはれ。二方の鳥よ獸よ。ひとしけくかはゆきもの

を、ひとしなみかなしと思ふを、いづれ別きいづ
れや隔つ。かにかくに両手あげつつ、かるく叩き、
撫でてあやせば、羽根はたき尻尾ふりふる。ひも
じきかさらば食せよと、ひとつ掌に牛の乳盛れば、
子鴉はみぎりより来て、犬の子は左より来て、嘴
と口つつき合せて、啄き嘗め、啄き嘗めつす。ま
たそねみ、惜しみ、憎まず。あなあはれ、空飛ぶ
鳥と、地を匍ふ家の畜と、いつのまにかくや馴れ
けむ、なじかさはかくも親しき。これやこの人の
我が掌に。相睦み和むを見れば、今さらに喜ぶ見

れば、この我や、みぎりひだりに、とみかう見涙
しながる。

童

と

母

麻布山

麻布山浅く霞みて、春はまだ寂し御寺に、母と我が詣でに來れば、日あたりに子供つどひて、風をあげ獨樂を廻せり。立ちとまり眺めてあれば、思ほゆる我がかぶる髮。ほほゑみて母を仰げば、母もまたほほと笑ませり。けだしくや我がかぶる髮、母もまたしのばすらむか。我が母は何も宣らさね、子の我も何もきこえね、かかる日のかかる春べに、

うつつなく遊ぶ子供を見てあれば、涙しながる。

反歌

垂乳根と詣でに來れば麻布山子供遊べり日のあたりよみ

母と來て佇み目守る日のたむる子等が遊びのいつはつるなし

童と母

垂乳根の母の垂乳に、おしすがり泣きし子ゆゑに、
いまもなほ、我を童とおぼすらむ、ああ我が母は。
天つ日の光もわすれ、現身の色に溺れて、酒みづ
きたづきも知らず、酔ひ疲れ歸りし我を、酒のま
ばいただくがほど、悲しくもそこなはぬほど、酔
うたらば早うやすめと、かき抱き枕あてがひ、衾
かけ、足をくるみて、裾おさへ、かろくたたかす、

裾おさへ、かるくたたかす、垂乳根の母を思へば、
泣かざらめやも。

反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲團を
たたかれ

老いしアイヌの歌

老いしアイヌの歌

アイヌはよ、老いしアイヌ。神アエオイナ、アイ
ヌ・ラクダル（アイヌの奥ひある人）の後、神ながら葉蔓の
頭かぶ。土の體たい、柳の背骨、シネ・シツキ・プイコロクル
（眼窩の人）神々の髪かみの毛の人。彼こそはげに、カム
イ・オトプ・ウシユ・グルなれ。

彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にかき垂り、

家屋の外に萱疊敷き、さやさやと敷き、嚴かしき
アツシシ、マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐ、ふかぶ
かとその眼凝れり。

彼アイヌ、蝦夷島の神、古傳神、オキクルミの裔
ほろびゆく生ける屍、夏の日を、白き日射を、う
なぶし、ただに息のみにけり。

彼アイヌ、家屋の空見ず、さやら葉の青の長葉の、
アイサク・ピヤパ(髯なき稷)フレ・ピヤパ(赤き稷)チャク・ピ

ヤパ(ほせ稷)ヤムライタ・ヨコアママ(藪虱に似し稷)、ま
た、脚高の熊檻、仔の熊の赤き舌見ず、汗垂らし、
拭ひもあへず。

彼アイヌ、老いたる鷺、古り皺み、病み倦んずる
者、ましら髯、いつかしきアツシシ、マキリ持ち、
研ぎ、あぐらゐ、オンコそぎ、心恍れり。

彼アイヌ、よく黙し、念じ、かつ、しかく黙せり。
彼、キム・チ・チパスクマ(山の教義)の徒、チクニアコシ

ラツキ・オルシユベ(樹の守護の教義)の徒、地上の者、聖
シランパの子、黙想者、聖トボチの僕、彼はかく
念ずらし。アトニ・ウエンユク(悪楡よ去れ。ニ・アシ
ユ・ランゲ・グル(をを汝立木人よ)キサラハ・ランゲ・シヌブ
ル・カムイ(をを汝木の皮の尊き鬼神よ)オ・トイヤン・クツタ
リ(汝地上に擴張せる者よ)總て善し、吾は拜せり。吾は
老い、吾は嘆けり。吾は白し、早や輝けり。吾は
消えむ、ああ早や、吾が妻、吾が子、吾が弟、吾
が族の、残れる者、ことごとく滅せん。オンコ(い
ちあ)よ、吾が削る、紅柔き兎の肉なすオンコよ、

しかく光らん。

彼アイヌ、老いたる鷺、蝦夷島の神、古傳神、オ
キクルミの裔、ほろびゆく生ける屍、光り、かつ
白き屍、彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にか
き垂り、嚴かしきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、
あぐらゐ、夜なす眼の窩のアイヌ、今は善し、オ
ンコ削ると、息長に息吹き沈み、恍惚遊び、心足
らふと、そのオンコ、たたりたたりと削りけるか
も。

長歌創作年表

大正五年五月(葛飾にて)

童と母

麻布山

大正六年二月(葛飾にて)

夜の雪

鳥の啼くところ

大正十年六月(葛飾にて)

アッシジの聖の歌

米の白玉

犬と鴉

立枯並木の歌

潮來の入江

大正十一年一月(小田原にて)

大正十二年三月(小田原にて)

黎明の不盡
秋山の歌
竹と曼珠沙華
蜩の歌
榎と栗
冬 mountain 山岨
荒浪千鳥
落葉吟
竹林の早春
路の臺
ころころ蛙の歌

遠山脈の歌
湯どころの歌
竹の林の歌
岡の鉾杉
孟宗と月
冬の棚田
落葉行
水仙と菊
元旦の夜のこと
聴けよ妻ふるものあり

大正十四年二月(小田原にて)

造り酒屋の歌
道のべの春

餅つき
の歌
浅春

大正十二年九月(小田原にて)

水之尾の秋

大正十三年三月(小田原にて)

竹と我

大正十三年四月(小田原にて)

最勝閣にてよめる長歌ならびに反歌

冬ごもり
日あたり
見え来る春
春 鶉
のどか

ととのはぬ春
をさなき春
福壽草
あるとき
つくし

種子蒔
月光と魚
米と雁

大正十四年四月(小田原にて)

双柿舎

大正十五年一月(小田原にて)

老いしアイヌの歌

昭和三年十月(世田ヶ谷にて)

言祝

この頃は
魚賣
荒彫の牛

附記

以上は潮音(大正五年)三田文學(大正六年)行人(大正九年)大観(大正十年、十一年)日光(大正十二年、十三年、十五年、昭和二年)改造(大正十三年)行樂(大正十四年)婦人の友(昭和三年)等に發表せられたるところに係る。
なほ「童と母」麻布山の如きは葛飾に於て成れりと雖も、その取材に至つては曩の麻布の生活に得たるものなり。

N 744

昭和四年五月十日印刷
昭和四年五月廿日發行

算

金貳圓八拾錢



著者 北原 白 秋
東京市神田區北原町四番地
發行者 坂 口 保 治
東京市神田區錦町三丁目十七番地
印刷者 白 井 赫 太 郎

發兌

東京神田區
北原町四

梓

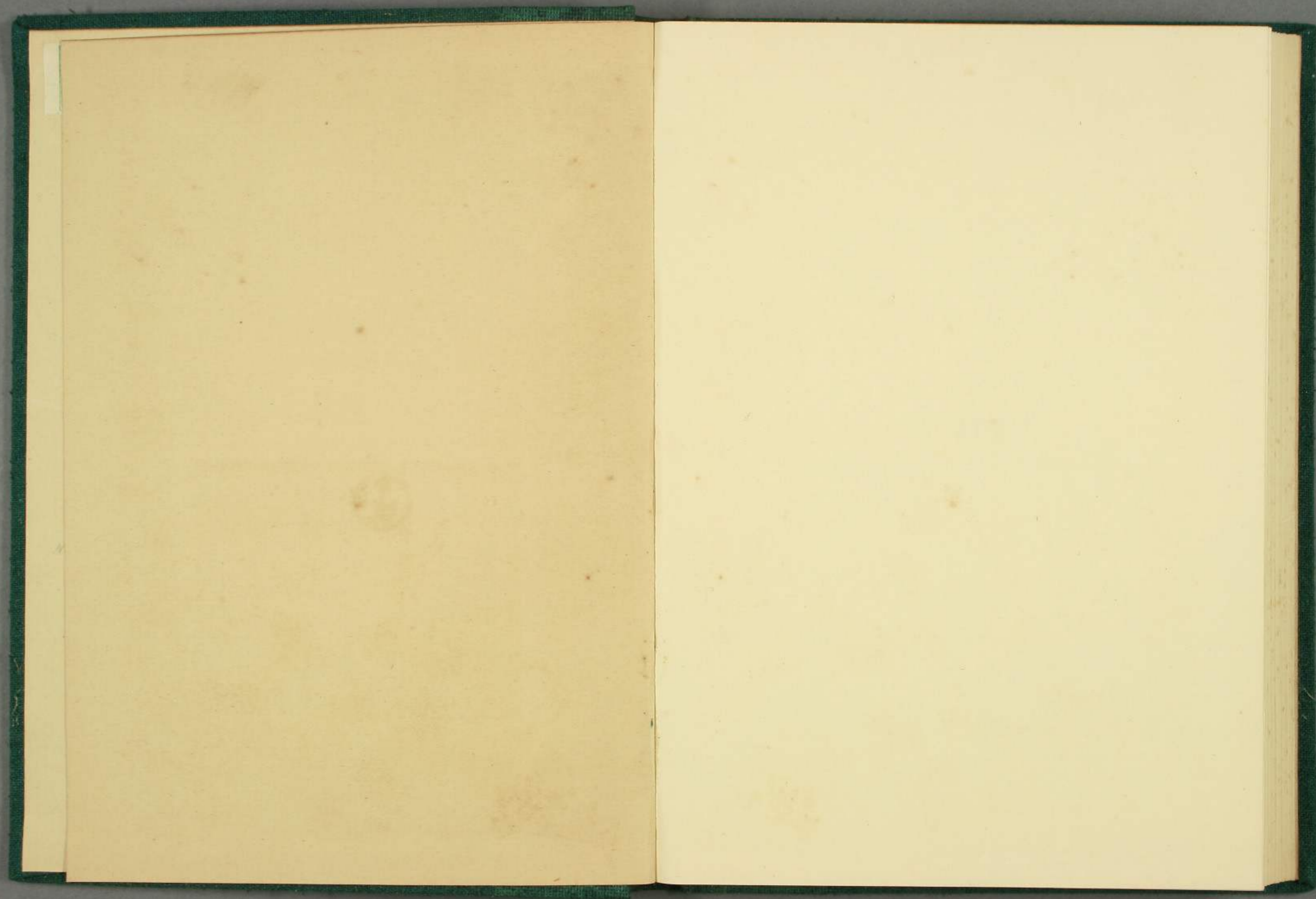
電話神田二七七五番
掛號東京七八六四番

發賣

東京神田區
錦町一ノ九

文

電話神田三五九三番
掛號東京五八七二番



内外古書籍
木公堂書店
古居南大津町

1100

